
蝶葬

天ヶ森雀

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶葬

【Nコード】

N34380

【作者名】

天ヶ森雀

【あらすじ】

神蝶の化身である少女を、王は魔法の檻に閉じ込めた。ただ美しいものとして鑑賞する為に。
少女は絶望し、彼の真意など知らぬままに正気を失っていく。

谷山浩子さんの「七角錐の少女」とポルノグラフィティの「アゲハ蝶」のイメージで書いた、ファンタジー小説。

TIINAMIより転載。

虜囚

王は彼女を閉じ込めた。

それは魔方阵の光の線から成る、堅牢な檻だった。

窓一つない石壁と石畳だけの部屋の床に、両腕を広げた長さより少し余る直径の、正円の形に魔法の呪文が描かれ、それに内接する正七角形のそれぞれの角から中空の一点にむかつて光の線が伸びている。尖塔の様な七角錐の中空の1点に向かうななつの二等辺三角形は、人の目には見えない透明な壁が編まれている。

その中に彼女はいた。

少女の姿をした、一匹の蝶である。

「どうして、こんな事をするの」

鈴を振るような少女の声が向かった先に、一人の少年がいた。彼女より幼く見える。十二、三といったところだろうか。光のささめ暗闇のような瞳だけが「大人びた」というより老成した者のそれを感じる。疲れてひねこびた、昏い^{くら}目だ。

少年は億劫そうに目を閉じた。

彼女は重ねて尋ねる。

「いつまで閉じ込めておくつもりなの？」

壁にもたれ、だらしなく両足を床に投げ出したまま、やはり少年は答えない。

「こんな事をして、許されるところなの！？」

「許されるさ、俺は王だからな」

初めて彼が発した声は、さも当然とばかりに淀みがなかった。

再び向けられた皮肉げな漆黒の瞳には、かすかな灯が点るように、白い、彼女の姿が映っている。

「―わが領内の森にお前がいて、とてもきれいで気に入ったから連

れてきた。何が悪い」

王の声は淡々として、己が罪を露ほども感じていないらしい。彼にとって自分は一匹の鑑賞物でしかないのだと、白い蝶の化身は気付く。

彼女は信じられぬものを見た様に顔を歪めると、背中を追い立てる絶望から少しでも逃れようと、唇を噛んで王を睨み付けた。

古来より、蝶の化身は神の使いとされ、何人も触れてはならぬ禁忌であった。

その姿を見たものは魂を奪われ、その身に触れたものは神の怒りを受けた。

孵化して間もない彼女にも、厳然としてその理は内うちわらひにあった。自分は何故この境遇にあるのだろう。

なぜこんな場所に在らねばならぬのだろう。

そもそもなぜこの男は自分を捕らえる事ができたのか――。

彼女は何も覚えていなかった。

覚えているのは孵化した瞬間。原始の森には濃密な森の空気が立ち込めていた。

甘い蜜を吸うように、彼女はその大気を吸い込んだ。それが最後の記憶である。

あそこが、あの森が、彼女の在るべき場所だった筈だ。

それなのに――何故、自分はこんな所にいるのだろう――

不条理に対する憤りが彼女を支配する。

しかし、不条理の原因たる王は何も答えない。

王は度々彼女の元へと訪れた。とは言え、その部屋には扉さえなかった。王は、いつも光の幕を伴って、音もなく現れる。姿を消す時も同様である。恐らくは、強力な魔導師の力をもって。

窓一つない部屋に幽閉された彼女には時間を計る術もなく、魔力の磁場は本来彼女が持っていた体内時計も狂わせていたので、それ

が数時間おきなのか、一日おきなのか、はたまた数日おきなのか全く分からなかった。

が、少なくとも閉じ込められた魂が狂うよりは、早い間隔で来訪は続けられていた。

来訪の度に、彼女は開放を懇願したが、王は全く聞き入れようとしなかった。

「私をここから出して」

「…」

「あの森へ、私を返して」

「お前は私のものだ」

「いつまで私を閉じ込めておくつもり？」

「俺がお前に飽きるまで、かな」

「飽きる前に私が死んだらどうするの？」

「安心しろ、お前は死なない」

「何故そんな事が分かるの」

「…お前を捕らえているその檻は、特別な魔法がかけてあってな、可能な限り時間が遅く流れる様になっている。勿論並の魔同士にできる事ではない。俺が王だからこそ成し得た事だ」

「遅く…とは？」

「ほぼ、止まっているに等しい。少なからずこの部屋も影響を受けているからこうして会話は出来るが、俺以外は誰も出入り出来ぬよう、この部屋自体にも強力な封印がかけてある」

「なぜ、そんな事…」

「なぜ…？ もちろんおまえを美しいまま残す為さ。せつかく我が物としたのに、あっさり死なれてはつまらん」

欺瞞に満ちた王の言葉に、蝶は嫌悪を覚える。

ただ彼女を鑑賞するためだけに、彼は持てる権力を行使したと言うのか。

確かにその檻の内は暑くも寒くもなかったし、飢えや疲労、排泄さえも感じることはなかった。それ故に更に彼女は時間の間隔が無

くなつていったのだ。

「私はあの森へ帰れないの…？」

「…ああ、そうだな―」

王はそう言つて、口の端に非情な笑みを浮かべる。

彼女は信じなかった。あの森は聖地であり、自分が在るべき唯一の場所である。

己が魂を保つ為に、信じるわけにはいかなかった。

不条理に対する憤りだけが彼女を支配する。

しかし言葉は意味を成さない。

繰り返される懇願と頑なな拒否。終わらない堂々巡り。

伝わるものはなく、やがて伝えるものもなく。

来訪の度にお互いの言葉は減り、やがて対話は途絶えた。

彼女は床に描かれた魔法文字をなぞり始めた。金色に光る詠めぬ文字を指でなぞりながら、唇は故郷の森を語り続ける。生い茂る木々。鏡のような湖水。樹液は甘く、濃い大気が彼女を取り巻いている、この上もなく美しい彼女の故郷。決して忘れぬよう、心が挫け、諦めてしまわぬ様、彼女は語り続ける。そうして、彼女の問わず語りは王の在不在に関わらず続けられる様になった。

王は、そんな彼女を見ながら何も言わない。ただ一刻、また一刻と彼女を見つめ続けるだけである。その幼くも心を閉ざした顔からは、どんな表情も読み取れない。

王を見ない彼女と、彼女を見つめ続ける王と。

決して心が交わる事のない、二人だけの時間が淡々と過ぎてゆく。

風が唸りをあげていた。

馬上に佇む王の髪の毛が煽られる。

建国神話の舞台であり、国の水源でもある森の前に、感情を伴わぬ目を向けたまま、王はひと言「焼け」と命令を発した。

傍らに控えた白衣の神官が悲鳴を上げる。

「この森は―っ、神のおわす森ですぞ…！」

「それがどうした」

「神の怒りに触れましようぞ！ どうぞ、陛下、なにとぞ…！」

震える指を祈りの形に組んだ老神官に一瞥もくれず、王は再度、配下の者達に促した。

「何をしている。王の命令だぞ？ 構わぬから焼き尽くせ！」

朗々と響く圧倒的な王の声に、背後に控えた者達は、無言のまま木々の根元に油を撒くと、風下に向かって火矢を放つ。

手際よく放たれた火は次々と燃え上がり、黒煙と紅蓮の炎が空を舐め上げた。

神官は膝をつき、声を殺して凄惨な風景に滂沱の涙を流す。

王は何も言わない。

漆黒の瞳には、うねる緋の龍がと舞い散る火の粉だけが、赤々と映っていた。

その夜、檻の蝶は何も知らず、いつもどおり魔法陣をなぞっていた。

語る言葉には微かな抑揚がつき、まるで赤子を眠らせる母の子守唄のようにも聴こえる。

王は黙っていつもの壁際に腰を下ろすと、黙って彼女を見つめる。時間が止められたままの彼女は、相変わらず美しい。

白い肌。柔らかい曲線を描く身体。背中から広がる透き通るような白い羽と、額から延びる二本の触覚だけが、彼女が人ではない事を示している。

それでも彼女を形作る全てが神々しかった。

例えその瞳に何も映さなくても。

例えその瞳が王を映さなくても。

喉の奥から押し殺された笑いが漏れる。

彼女の詠唱を邪魔せぬ様、王は声をたてず笑っていた。

しかし蝶は気付かない。

気付かぬまま、美しい故郷の唄を歌い続ける。

だから、齒を食いしぼり、世界を呪うようなくぐもった笑みの奥で、落ちくぼみ始めた漆黒の瞳に一粒の涙が滲んで消えた事も、当然知る由はなかった。

やがて、彼女の魂が己の言葉さえ認識できなくなる頃、王の来訪は途絶えた。

しかし彼女は既にそんな事にはとくに気付かなくなっていた。

石畳に描かれた魔法文字を細い指で辿りながら、意味さえ成さなくなった言葉を語り続ける。

だから――

彼らの上に、季節が七巡するくらい月日が流れたのも彼女は勿論知らなかった。

蝶葬

初めは気付かなかった。

外界を遮断していた彼女には、王以外の者が目の前に立つても、それが何を意味するか分からなかったし、分かるうともしなかった。「王が身罷りました」

黒衣のローブを纏った男がそう告げたとき、初めて彼女の額の触覚がわずかに動いた。

ゆっくりと視線を合わせる。足元の見えぬローブの丈。額には魔石を埋め込んだ銅の輪。^{アカガネ}古来より続いている高位魔導師の様相。卓越した魔術のオーラ。ならば、自分をこの檻に閉じ込めたのは彼なのだ。

「少しだけ、私の話をお聞きください」

彼の態度は礼節に満ち、神の遣いである蝶に対し、己の分を弁えている。

そして彼自身の持つ能力で、蝶の心眼を己に向けることに成功していた。

永い眠りから目覚めるように、蝶は周りの空気に耳を傾ける。

蝶の覚醒を知覚すると、魔導師は抑揚のない声で語り始めた。

大きな戦争があつた。^{いくさ}この国ではない、西の大国同士が利権と覇を争い、周りを巻き込んだ。周辺国主だった国王も何とか戦火の拡大を防がんと尽力したが、元より仲の悪かった二国である。その勢いは停まる事を知らず、そのやり口は凄惨を極めた。

やがて。

互いに兵力も摩耗仕切った頃――どちらから始めたかは誰も知らぬ――お互いの国に毒を撒き始めた。毒は水と空気を汚し、大地を枯れさせ、多くの命を奪っていった。それこそ立案者の予想を大きく上回って。

土地は荒れ、麦は枯れる。

わずかに残った収穫を口にしたものは、身体に異常を覚えた。

声を無くす者、光を失う者、手足が動かなくなる者もいた。

森に獣や鳥はいなくなり、川に魚もない。

戦う者が誰もいなくなっても尚、その地獄絵図は延々と続いたのである。

「元より国境は人が定めしもの、同じ大地にいる以上被害が及ばぬわけはありませんでした。国中の魔導師と科学者が集められ対策を講じましたが、被害は広がる一方で――」

不意に言葉が途切れた男の目に、遠く映ったものは守り切れず広がった焦土だろうか。それとも、累々と焼かれるために重ねられた民の屍の山だったろうか。

「貴方が生まれた森は、この地の最後の楽土だったんです。

陛下が、失われつつあるあの森で貴方を見つけた時、何を思われたかは分かりません。……ただ、生来の病であの姿のまま即位されて以来、あの方は、正妃はおるか愛妾もお持ちになろうとなさらなかった。

貴方は、彼の君が望んだ唯一の存在でした」

そこまで言うと、男は大きくひとつ、息を吐いた。

「どんな方法を使っても、貴方の姿を残せとの仰せでした。と、同時に何があっても森を守れとお命じになられた――」

多くの魔導師や科学者の力で、森の僅か一部が守られた。

毒の循環を断ち切るためには、その多くを焼き払うしかなかった。そこまでしてその森を守る理由を、王は口にせず、配下の者たちもその問いを発する事はなかった。

恐らくは、その森の僅か一部だけでも残し得る事が、人々にとってわずかな希望の象徴となっていたのだ。

それでも――

人の身が神蝶を拉致して良い理由にはならない。

男は神蝶に対する己の罪を自覚していた。が、もちろん謝罪が無為であることも知っていた。

部屋には再び沈黙が訪れる。白い指はもう、七角形をなぞってはいない。海底の、深い闇のような沈黙を破ったのは、彼女の方だった。

「あのひとは、どこー？」

王族のみが葬られる、教会の尖塔にあるさほど広くない最上階の安置場で、美しいアラベスク模様が彫り込まれた石の棺の中に王は横たわっていた。

肉の削げた頬が最期の苦痛を思わせ、幼い姿がいつそう痛々しい。只でさえ成長しない体を持ち、その上強いられた毒との戦いで、彼の体は死に蝕まれる事を自覚していた。

蝶は床に跪くと、王の顔をのぞきこんだ。

彼女にしか見えない魂の片鱗が僅かに残っている。

（私の声が聞こえる？）

（…ああ。）

（あなたが捕えた虫を、覚えていて？）

（ああ、覚えてる）

（貴方は私を閉じ込めた。何も話さず、何も求めなかった。本当のことを言えば、私はあんなに苦しむこともなかった。貴方の事を憎んで拒む事も。―なぜ？）

（何も、話す必要などないと思ったからな）

（そのせいで私が狂っても？）

（…森が生き返るとは限らなかった。無駄な夢を見せる必要はあるまい？）

（―なぜ、私だったの）

（…そうだな、あの喪われつつある森で、孵化したばかりのお前を見た時——我を忘れて手を延ばした。覚えているか？ お前は自ら私の手にとまったんだ）

王の指先に残る淡い蝶の軌跡。

少女の脳裏に甦る、森の残像。濃密な森の空気を吸い込み、ふと瞳を開けると眼下に彼がいた。

見開いた目。少女より尚、幼く見える容貌なのに、なぜか永遠の孤独を知るような深い闇色の瞳。

（あの時…あの時…、何かが私を引き寄せた…）

蝶は、眉根を寄せて記憶を手繰り寄せようとした。

（俺の、ものだと思った。俺だけのものだ）

（分からない、分からない…）

（守ろうと思った、どんな手段を使っても、と）

（私を見る貴方の…）

（その反面、誰の目にも触れさせられなかった）

（貴方の目が…）

（俺だけのものにしてしまいたかった）

（こわ…く…て——）

（憎まれても構わない。ただ、お前を見つめていたかった…）

蝶は自らの口を両手で覆うと、嗚咽をもらした。

（分かっている？ 貴方はひどい人だわ）

（—ああ、そうだな）

長じる事のなかった声に苦笑が混ざる。

耐えきれず俯き、そのまま両手で自分の顔を覆った。

この時、胸の奥に沸き上がった感情が何なのか、蝶には分からなかった。憎しみではない。悲しみとも違う。心臓を擦るような熱い痛み。

後ろに控えた魔導師が、かける言葉もなく立ち尽くしていた。

「…本当にひどい人…」

訝しげにのぞきこんだ魔道士の目に、痛みを堪えるように笑う彼

女が映る。

蝶はそのまま王の上に屈みこむと、静かに唇を重ねた。

不意に石室が光に満ちる。

目を刺すような激しい光に魔道士が目を背けた瞬間、少女の姿は消えていた。替わりに、一羽の蝶がひらりと舞い上がり、高窓から飛んでいく。

魔道士が慄きながらも改めて王の棺を見下ろすと、感情のなかった死に顔に僅かに笑みのようなものが見えた気がした。

「これで良かったのですか、兄上……」

蝶が飛び立った高窓からは淡い日差しがさしこみ、王の顔を照らしている。

魔道士は諦念の笑みを浮かべ、頭を垂れると、深く静かに瞑目した。

荒れた土地を無心に耕していた、痩せっぱちで泥だらけの手がとまる。暮れてゆく茜色の空を見上げ、はしゃいだ声をあげた。

「母さん、蝶だよ。蝶が飛んでる！」

声をあげた子供のかたわらで、盲いた母親が笑顔を見せた。

「おや、蝶なんてこの目が見えなくなるより前からいなくなったと思っていたけどねえ。で、一体どんな蝶なんだい？」

「とっても綺麗な蝶だよ。真っ白でね、ふちが光をまぶしたようにきらきらしてる。まるでこの世のものじゃないみたいだ……」

まだ絶望に沈み切っていない幼い声が、うつとりと頬を染める。

「それは……神蝶かもしれないねえ。きつとどこかで高貴なお方が亡くなったんだらうよ」

「どうして？」

「蝶はね、死者の魂を運ぶのさ」

< E
N
D >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3438o/>

蝶葬

2011年4月27日14時10分発行